

シェイクスピアの Farewell Sonnets について

飯 沼 万 里 子

シェイクスピアのソネット 154 篇のうち、第 1 番から 126 番までが若い身分の高い男性に対して書かれたもので、127 番から最終番までの主題がいわゆる 'Dark Lady' であることは語るまでもないことであるが、Farewell Sonnets と呼ばれている第 87 番から第 94 番までの 8 篇は、第一部とも言える若い男性を対象とした一連のソネットの中でごく短かい sequence をなしている。Farewell Sonnets と呼ばれるのは第 87 番が 'Farewell'¹⁾ という一語で書き出されていることによるのであろうが、実際は詩人はこの sequence の中で愛する者に別れを告げてはいない。97, 98, 99 の三篇が absence のソネットと呼ばれ、又それについて、一種の仲直りと受けとれるソネットも出てくる流れの中で、Farewell Sonnets はいかにもその名にふさわしい位置を占めてはいる。そのうえ 76~86 番においていわゆる Rival Poet も登場して劇的なシチュエーションも完全に整っている。しかしこの 8 篇の Farewell Sonnets において詩人は別離を歌っていない。もっとも愛する若者の方から詩人が別れを告げられているということはあり得えようが、それは詩人の側が歌っていることから読者が推測するにすぎない。相手の言い分は聞く手段もないので、丁度 dialogue の一方のせりふを完全に抹消してしまったものを前にした状態に読者は置かれる。勿論ソネットは劇ではない。しかしソネットの性質上「愛する者」を設定し、その愛する者に対して歌うという姿勢を詩人は取らねばならない。その姿勢は様々で、愛する者に対する讚美から冷たい恋人に対する恨みまで、いかようにもシチュエーションを設定することができるであろう。事実シェイクスピアのソネット集はコンヴェンションに則ったもの、コンヴェンションの枠をはみ出したもの、シチュエーションは非常に多様性に富んでいる。そして Quarto 版の Thorpe によるソネットの配列がシェイクスピアの意に適ったものであったのかどうかはさておいて、第 1 番から sequence でまとめながらシチュエーションをおさえて読んでいく時、第一部に関して言えば、詩人よりはるかに身分の高い美貌の若き貴公子との友情、貴公子側の裏切りによって徐々に

友情にひびを大きくする亀裂（詩人の愛人を貴公子が我がものとしてしまったといった事態も推察出来る）、そしてついには詩人である「私」にとって致命的な状況になってしまう、即ち Rival Poet の出現によって「私」は、「愛する者」に詩を捧げること、相手を自分の詩の主題にすることをもはや許されなくなってしまふ——といった経緯が読みとれる。このソネットの示唆する物語を、文字通り「私」をシェイクスピアと受取って、当時の歴史の中から W. H. あるいは the Friend と呼ばれる相手、又 Rival Poet を発掘しようという努力、それも虚しいと思われる努力が長い間傾けられたのである。シェイクスピアのソネット集の注釈書を見ると、最もソネットの裏側の歴史に力を注ぐ Dover Wilson から、パンクチュエーションと字句の解釈にのみ注目する Ingram と Redpath まで様々であるが、ほとんどの注釈者がこのソネットが事実に基づいているという前提に立っているように思われる。the Friend の正体探しに批判的に思われる Seymour-Smith でさえ、このソネット集で吐露されている「私」の相手に対する愛をシェイクスピア自身の真摯な気持ととらえている。²⁾ 他の詩人たちのソネットにこれほどその詩人自身の歴史的事実を読みとろうとするだろうか。たとえきっかけとなる事件が実際にあったとしても、それはシェイクスピアのソネットという詩形式で書くことに挑戦する意欲をそそただだけで、コンヴェンションに添いつつ、あるいはコンヴェンションの枠をはみ出しつつ、様々な虚構としての恋のシチュエーションを生み出していったと考えることは不可能なのだろうか。もっとも Seymour-Smith はシェイクスピアのソネットを private なものだと言っている。³⁾ ソネットは恋人に歌いかけるという非常に private な状況にある詩形式であるが、理想的な愛（それがネオプラトニックな愛であれ、宗教的愛であれ）を歌うという点から general な詩形式ともなっている。シェイクスピアのソネットが private であるという時、シェイクスピアという個人にとって private であるという意味でなければならないのだろうか。Yvor Winters⁴⁾ が第 116 番のソネットを引用

して、8行目の 'worths' を例にあげて言外に意味を暗示する言葉のあいまいな使い方を論じている。事実読者は明確な輪郭を持って判断できない言葉にぶつかる時、当事者同志ならばストレートに意味がとれるのではないかと思わせられる。その事が一層このソネット集を private なものと感じる原因であろうが、それが詩人の「手」でないと誰に言えるだろうか。高貴な身分の若者のと間の友情、そこに愛人と Rival Poet をはさんでの愛の葛藤が現実にあったのかなかったのかは、今更誰にもわからないように思われる。又あったとしても、それはしたたかな詩人にソネットを書くシチュエーションを提供することで意味があったし、詩人は現実に即していようがいが、そのシチュエーションから様々なヴァリエーションを生み出したのだと考えたい。Farewell Sonnets と呼ばれるこの sequence もそういった種類の、詩人によるソネットの愛の世界の新しいヴァリエーションを生み出す実験と受けとることもできるのではないだろうか。そしてシェイクスピアはその実験に成功したのである。

sonnet sequence を何番から何番までに区切るかということもむづかしいことである。私は Dover Wilson の区分にそのまま従っているのであるが、⁵⁾ 勿論異なった考え方もあって、特に94番を Farewell Sonnets からはずして、95番、96番と一まとめにする意見もある。又 Dover Wilson は49番を Farewell Sonnets の中に入れているが、私は一応 Thorpe によるソネットの順番にそのまま従ってみたいと思う。勿論この sequence は87番の第一行目の最初の言葉、'Farewell' によっている。しかしこの言葉は詩人の方から望んで発せられたものではない。恋人の方が詩人から去って行こうとし、引きとめる手段を一切持たない詩人のやむを得ぬと見きわめた言葉である。Quarto 版では 'Farewell' のあと何のパンクチュエーションもないが、Dover Wilson の版では感嘆符を置いている。感嘆符の解釈も様々であろうが、Ingram と Redpath⁶⁾ によるダッシュの方がまだしもこのソネットにふさわしいように思われる。ここに歌われるのは詩人の側からの積極的な別れでは決してないからである。このソネットには 'estimate', 'Charter', 'releasing', 'bonds', 'determinate', 'granting', 'pattent', 'misprision' といった物の売買に関する法律用語が頻出する。一般的に言ってシェイクスピアのソネットでは一つのイメージは長つづきしない。一つのテーマにいくつもの比喩が与えられ、イメージ

の重層性とその詩を複雑にすることもあれば、次々とイメージがイメージに追われて、印象が分散してしまうこともある。しかし87番に関して言えば、売買あるいは価値査定に関する法律用語でこのソネットのイメージが統一されているということが、即ちこの詩に歌われている愛の性質を物語ることになると思う。一行目の 'thou art too deare for my possessing,' という考え方はごくありふれたものである。愛する者の理想化は自らを貶めるという手段によっても逆説的に成立するからである。87番においても一見その方程式が使われているようにみえるのだが、詩人の自らの貶め方は徹底している。彼は自らを全く主体性のない存在として規定している。愛にもともと彼はふさわしくなかった。それは一時的に彼に貸し与えられていただけであった。それも恋人の側の自分の価値を低く見、詩人の価値を高く見積るという判断の誤りから起ったものであったから、自分の誤りに気付いてもともと不当に貸し与えていたものを引きあげたとしても、詩人はその仕打ちにあらがわない。それどころかそれは 'better judgement' なのだ。詩人の運命は恋人の手中に握られていて、しかも今その手中からはおり出されようとしている。従って結句の二行に凝縮された感情は読者に強く訴えるものがある。

Thus have I had thee as a dreame doth flatter,
In sleepe a King, but waking no such matter.

愛の日々は一時の夢であり、王侯の気分を味わったが、夢が醒めれば王どころか何とみじめな存在であることか。このソネットを締くくるのにふさわしい感情である。しかし Seymour-Smith は最終行に対して、'This may refer to the Friend as well as to Shakespeare himself.'⁷⁾ という注をつけている。この注は何を意味するのだろうか。それは「英語青年」1973年1月号⁸⁾ の誌上でこのソネットを合評している三氏も議論している点である。非常に大きな特権を持ち、意のままに与え、又意のままに奪い取るという観点からは詩人よりもその相手の方が王と呼ばれるにふさわしいであろう。しかし重要なのは恋人が王であったのは「眠り」の中においてであった。夢のように一瞬に消えた愛の日々においてであったのである。恋人が詩人に向けた愛こそ正当な愛、理想にかなった愛であり、その愛によってこそ恋人も臣下（詩人）に対するすぐれた王になり得たのであった。愛が正しい秩序をもたらししていた。今その愛は消え失せようとしてい

る。なるほど今も生殺与奪権を持つのは恋人で詩人はそれに対してなお術を知らない。その恋人の持つ力が売買、値打を定めることに関する法律用語で表現されると、愛の世界は冷たくいやしい金銭の世界へと変る。そしてこのこの上なく高慢な、そして多分抗し難い魅力を持った恋人も、外観はどうであれ、王者の身分から転落する。今となっては愛の成立し難い世界で詩人は愛をどう歌い続けようとするだろうか。

第88番、89番の二つのソネットの歌う内容はほとんど同じだと言ってよいだろう。一口に言ってそれは詩人の側からの一人相撲による愛情表現である。この高貴で傲慢な相手には詩人程度の愛人ならば捨てることはいとやすいことに違いない。けれども詩人は自分の方から相手が自分を捨てやすい状況を作ってやろうとするのである。そうすることが相手を受することになるという倒錯的な世界に詩人は身を置いている。但しこの倒錯的世界も詩人の幻想が生み出したものにすぎず、詩人の側のどんな動きも相手のあり方に揺動も影響も与えはしないだろう。しかしシェイクスピアはもうこれ以上行き場所のない愛情を歌うためにこの虚構を設定したとも言えるのである。相手にとって残っている行為が自分を捨てることだけであるならば、自分が捨てられるにふさわしい存在にならねばならない。即ち相手の行為が「不実な」振舞でなく、誰の目から見ても納得の出来ることであるために、第88番では自分自身の欠点、犯したあやまちを自らふれまわってもみよう、つまり、

Upon thy side, against my selfe ile fight,

という状態に自らを置こうというのである。第89番では詩人側の自らを貶めようという動きは一層強まっている。第88番が「あなたが私を軽んじたい気持ちになったとき」とまだ条件つきであったのに対して第89番は

Say that thou didst forsake mee for some falt,

という命令形の第1行目から始まる。もっともこの‘Say’をも条件と解釈することもできるだろうが、第4行目の‘Speake’と共に命令形ととり、詩人の口調が切迫し直接的になっていくのを読みとるべきであろう。Farewell Sonnetsのsequenceは、続く第90番も‘Then hate’と命令形の第1行目に始まり全篇命令形に満ちているし、第92番も‘But doe thy worst’という命令形に始まる。このことはこのsequenceに

流れる気分を語るものの一つである。詩人が自らを一層隅へ隅へと、切羽詰った状態へと追いつめていく切迫感が単純で直接的な文体を取らせているからである。もともどもどって、88番から89番への推移を見ると、詩人の側の緊迫感は例えばそれぞれの最初の quatrain を比較しても感じとれるであろう。88番が‘When’から始まる二行の条件節から始まるために少なくとも三行目を読まないと一つのセンテンスが完結せず、四行目がさらに三行目を敷衍しているのに対し、89番においては、一行毎の文章を完結したものと読むことが出来るので、読者は行と行とを複雑につなぐ必要はなくスピードをつけて読みおろしていくことが出来るだろう。89番の特徴は例えば、8～10行にも典型的に見ることができる。

I will acquaintance strangle and looke strange:
Be absent from thy walkes and in my tongue,
Thy sweet beloved name no more shall dwell,

8行目、9行目はそれぞれ中央に‘and’があり、それが短い文章をつなぐことによってスピードを増すことに役立っている。事実詩人の側から恋人との親交を絶つことを持ち出すことにしか愛情の表現が見出せないほど追い詰められていれば、比喩やイメージを駆使する余裕などはない。直接的な単純なセンテンスにならざるを得ない。そして‘I will acquaintance strangle’、即ち、詩人にとっては恋人と会うことをやめるということが殺人に等しいということは、同時に詩人の思い切れなさをも強く浮かびあがらせてくる。

ここでもう一度88番にもどってみよう。詩人の口調とは裏腹に実は彼は恋人を思い切れないのだということ、その踏ん切りのつかなさ、*「こうすることによって私も得をするのだ」* (1.9) という風に、理屈をつけて自分を納得させる部分にも現われているように思われるからである。彼の計算によれば、

For bending all my loving thoughts on thee,
The injuries that to my selfe I doe,
Doing thee vantage, duple vantage me.

(ll. 10-12)

しかし「あなたに利益を与えることが、私に二倍の利益をもたらす」ということは何のことを語っているのであろうか。この一見実に合理的に思われる計算が、実は少しも鮮明な数字を示さないのである。字句にこだわる Ingram と Redpath はこの部分にも注をつ

け、⁹⁾ 長々と解釈を示しているが、どうも要領を得ない。彼等の解釈のうちわかりやすいものを一つあげると、詩人は恋人と自分を同一視しているので、恋人の利益は即ち自分の利益となる。この両者をあわせると‘duble’となるのだというのだが、この解釈で読者は説得されるだろうか。そうは思えない。Iver Wintersでなくても読者は時にシェイクスピア自身に解説を願いたいと思う場合にこれもあたると言えるかもしれない。しかしここに結句の二行を引用してみよう。

Such is my love, to thee I so belong,
That for thy right, my selfe will beare all wrong.

‘for thy right’の解釈はさておいて、14行目が‘right’と‘wrong’を対比させていることは明確である。言うならば恋人に「善」のみを持たせるために詩人は「悪」を一手に引受けているのである。二人の関係はポジとネガの関係であると言うこともできよう。そして写真のネガとポジが互に容易に入れ代ることができるように、詩人と恋人の位置も交替が可能であることを暗示していないだろうか。そしてこのことと12行目を重ね合わせると、利益を失い続けている詩人と利益を得つづける恋人の位置がそっくり入れ代る場合を詩人はひそかに予測しているのではないかとも思えてくるのである。丁度カードゲームで負のカードを一組そっくりそろえてしまえば、勝負がひっくりかえってしまうように。そうなった時にこそ詩人の得るものは‘duble’なのではないかとかんぐりたくなってくる。常に下手に出る姿勢を崩さない詩人のしたたかさといったものをここに読みとってはいけなさそうだろうか。しかし詩人は88番、89番に採用したシチュエーションのままではもうこれ以上歌いつづけては行けなくなっている。88番の12行目に典型的に示された詩人对恋人の緊張した対立が崩れてくるからである。この対立こそ大前定であるのに、詩人の選んだシチュエーションが詩人の自己分裂を招くからである。88番の3行目、‘Upon thy side, against my selfe ile fight,’が示すように詩人は詩人自らを相手に戦う運命を選ぶ。89番の結句はこの行の確認である。

For thee, against my selfe ile vow debate,
For I must nere love him whom thou dost hate.

詩人の自己分裂、自己と自己との争いに対する理由を最終行は挙げている。が、それは詩人の自己分裂を一層複雑にするだけである。なぜなら「あなたの憎んで

いる者」は即ち「私」であり、あなたの憎んでいる者を共に憎む私を、あなたは憎んでいるのだから。このように詩人の自己分裂が対立を複雑にし、視点をふやしてしまえば、詩人はこの迷路から抜け出して行くしれない。

89番から90番への移行は89番の最後の行の最後の部分‘thou dost hate’をそのまま利用して‘Then hate me when thou wilt,’と第1行を起している。一つのソネットの結句と、それに続くソネットの第一行とを結ぶ尻取遊びも、この sequence を特徴づけるものである。第91番の最終行の‘All this away’は第92番の第1行の‘But doe thy worst to steale thy selfe away,’へとつながって行くし、第93番の第1行‘So shall I live,’の So は第92番の結句をそのままに受けてくる。この一連のソネットは丁度鎖の輪が一つ一つつながる形でまさしく sequence をなしている。しかし今89番と90番との内容を比較してみると、第89番の詩人の姿勢、自分で自分を貶めよう、或いは愛の舞台から相手に言われぬ前に自分で退場して行ってしまうという形での愛情表現とは、違ったものになっている。読者は88, 89番に執拗に歌われた詩人の自己否定が90番で又一層度合を深くしていることを期待するのだが、詩人は‘Then hate me when they wilt,’とつなぐことによって、この hate という語を梃子にして意識をずらしてしまっている。ここで詩人は「御随意にどうぞいくらでも私を憎んで下さい」と言いつつ、相手の憎み方に注文をつけていくのである。それは88, 89番における詩人と相手とのあり方、つまり詩人より一段も二段も高い位置にあって、詩人が何をなさそうと一顧だに与えぬであろう恋人と、その恋人に対していじらしいほどの努力を虚しく重ねている詩人というシチュエーションとは微妙にずれがあるのである。88, 89番における詩人は相手に委細かまわず自分の勝手な行動を押しつけていたのに、90番においては、それが「憎み方」ではあっても、相手に依頼する、相手に請い願う、相手の動きを引出そうという形になっている点で、コンヴェンショナルな感情に近いものになっているように受けとれるのである。「あなたが私にひどい仕打ちをするのなら、最も強い打撃を最初に与えてほしい、こまごまと苦しませておいてそのあとに最もひどい一撃を与えるなどということはしないでくれ」と言う内容を、‘after losse’, ‘rereward’, ‘conquerd’, ‘onset’ といった戦争の用語を入れつつ歌っているのだが、戦いのイメージを用いる余裕といい、又最もひどい一撃即ち私を捨てる事を早くすませてしま

ってくれということが、その逆の私を捨てないでくれこそ本音であることをかなり容易に読者に見抜かせるように書いていることといい、技巧的にはこれより前の二つのソネットよりも凝ってはいるものの訴える内容は複雑ではないように思われる。ある意味で90番はこの sequence の中の一休止であるかもしれない。

この一休みの気分は次の第91番のソネットの開始の数行にもつづいていえると言えそうである。特に凝った技巧ではないかもしれないが、anaphora を使った四行で悠々と開始され、第二 quatrain の最後に至るまで「私」という言葉も出てこない。しかし第9行目にいよいよ「あなたの愛」という言葉が出てくるとこのソネットはたちまちこの sequence 独特の色彩を帯びてくる。

Thy love is better then high birth to me,
Richer then wealth, prouder then garments cost,
Of more delight then Hawkes or Horses bee:
And having thee, of all mens pride I boast.
Wretched in this alone, that thou maist take,
All this away, and me most wretched make.
(ll. 9-14)

「あなたの愛を自分のものにしているということはどんな人のどんな喜びにも優る喜びを手にし、すべての人の誇りを誇っていることなのだ」と詩人は言う。従って詩人は第9行から12行の4行の間、この世のどんな人よりも高い地位に、即ちこの世で到達できる最高の地位に居る。詩人にそれを可能にしている条件は恋人の愛を自分のものにしているということである。そして結句で詩人はその条件のもろさを嘆かねばならないのだ。「あなたがこれを奪い去ってしまえば私ほどみじめな者はいない」のだから。この最高の地位から最低の点にまでの落差の大きさ、そして落下のスピード感は詩人の現在あるみじめな状態を際立たせる。詩人は再び恋人に対する虚しい押し問答を開始しなければならない。

88番、89番で見せた手はもう通用しない。何か新しい姿勢をとらねばならない。詩人は恋人からどんな仕打をされてもかまわない、相手の態度にかかわらず、自分は幸せでいられるということだけをひたすら述べていこうとする。ある意味で88番、89番におけるより一層消極的な存在になろうと努めるのである。

92番は「どうぞどんなひどい仕打でもして私から逃げてってくれ。しかし私の命はあなたの愛に左右されて生きもし死にもするのだから、愛を与えられて生き

るのも幸せ、愛を許されぬのなら死ぬることこそ幸せ、どちらにしろ私ほどの幸せ者はない。」というのが大意であろう。しかしこの詩は非常に内容を読みとりにくく、読んでいくにつれて不安定な気分にとらえられてしまう。例えば第2 quatrain を見てみると、

Then need I not to feare the worst of wrongs,
When in the least of them my life hath end,
I see, a better state to me belongs
Then that, which on thy humor doth depend.
(ll. 5-8)

一体、第5行目の「the worst of wrongs」というのは何を意味するのであろう。大方の注釈者の一致するところによれば、恋人が詩人を見捨ててしまうことである。しかし詩人は自分が捨てられることはこわくないという。なぜなら彼は「in the least of them」、つまり恋人のどんなちょっとした不実な仕打によっても命が絶えてしまうのだから。そして最も意味の取りにくい二行、7～8行がつづく。一体「a better state」とは何だろうか。「better」というのは「あなたの気紛れに一喜一憂するような状態よりも良い」という風に限定されている。すると今生きてなまじ恋人に時には愛を示され、時には冷たい素顔をされるという状態は詩人にとって「a better state...Than that」の「that」の方にあたるらしい。それではそれよりも「良い」状態とは何なのだろう。恋人の気紛れに一喜一憂しないですむ状態といえば詩人の命が終った時しかないし、その詩人の命を終らすものは恋人が詩人を捨てることではないか。詩人はもう恋人との確執に疲れはてて、いっそ死の方を選びたいと言おうとしているのだろうか。9～10行目も「私の命はあなたの心の変わりようしだいなのだから、不実な心で私を困らすことはできない」と言っているが、これも結局は同じことの繰り返しすぎない。しかも11～12行目の詩人の喜びの表現、「私は何と幸せな権利を持っているのだろうか、あなたの愛を得るのも幸せ、死ぬのも幸せ!」ということばは何と空しくひびくことであろう。それというのも読者が1行目から10行目までの詩人の論理を納得しないからである。それは詩人の論理が仮定を前提にして積み上げられてきているからであり、最も根本のところに据えられるべき恋人の詩人への愛が不確かきわるものであるからだだろう。その所を広島大学のスタッフは次のようにコメントしている。¹⁰⁾「——奇数行は偶数行で羽ばたかない。つまり偶数行で、詩人を止

揚させるはずの友人の愛の保証が弱いので、詩人は現実を脱し切れず、結局愛の止揚がならず、いわば平面の運動にとどまる。」つまり92番のソネットは詩人の側はいかに *make-believe* の世界で努力を重ねてももはやどうしても幻影さえも生み出すことの出来ないところにまで破綻し切った愛の世界の現実をさらけ出してしまっているのである。しかしこの12行の *make-believe* の世界は結句の二行のためにどうあっても必要なものであったと考えたいのである。

But whats so blessed faire that feares no blot,
Thou maist be falce, and yet I know it not.

この二行では詩人は完全に現実に立ちもどっている。「どんな汚れをも恐れぬほどに恵まれた美はない。」即ち恋人の類まれなる美は汚れに汚れているかもしれない。いや真実そうなのだ。詩人は '*Thou maist be falce*,' と言う、恋人が '*falce*' であるのはわかりきったことではあっても。そうして詩人は '*yet I know it not*,' と言い切るのである。恋人がどんな不実な振舞をなそうと、私は知らない。私は見ないのだ。詩人は改めてここで *make-believe* の世界を選びとったと言えるかもしれない。この互解してしまった愛の世界をなおも存続させ得る唯一の道を詩人はかろうじて見つけたのである。

第93番のソネットはまさしく詩人の *make-believe* の世界にしがみつき続けることを宣言する形で開始される。詩人は '*a deceived husband*,' 欺かれているのに妻の不貞には少しも気づかぬ夫の役を演じようと決意している。彼がその役を演じおおせる為の条件が運良くここにはある。愛する者の「顔」には詩人に対する愛が常にみえるからである。ただしその「心」の方は変ってしまっているかもしれないが。 '*Thy lookes with me, thy heart in other place*,' という4行目の一行が示すように今詩人は「心」の伴わない取繕われた「表面」のみを見ることで束の間の安心を得ようとする。恋人の「心」が今や他人のものになってしまっていることも十分に知ってはいる。しかしその恋人の心の不実さも無視することができるのだ、恋人の美しい顔に見せかけの詩人への愛が宿ってさえいれば。事実詩人の愛する人はこの世では希有な存在で、表情に心の動きがそのまま直接現れてしまう卑しい人々とは違っているのだ。神の申し子である彼の創造の時天が命じたのだ、彼の顔には優しい愛のみが宿るようにと。だから「あなたの思い、心の動きがどうであ

ろうと、あなたの表情の語るものは優しさだけなのだ。」しかしここに至ると、この全く虚構にすぎない愛は不自然さを隠しきれなくなってくる。ひたすら自己を貶める愛は88番から89番に至って詩人の自己分裂をひきおこしたのだが、「妻」の不貞を見て見ぬふりをし一途に笑いものにされる「夫」を演じ切る愛にももうこれ以上行き所はない。そのことに誰にもまして気づいているのは詩人自身であり、このソネットを締めくくるのは次の二行である。

How like *Eaves* apple doth thy beauty grow,
If thy sweet vertue answer not thy show.

最終行は '*If*' という条件節の中にくぐられてはいるが、詩人は勿論「あなたの外観が美德を伴わない」ことが真実であることは承知の上なのである。恋人の内面と外観の完全な乖離は詩人が12行にわたって自分は恋人の内面は見ないのだと言い続けたことでかえって鮮明にさらけだされている。そして不実な内面を包む恋人の美しさがイヴのりんごにたとえられているのは、多くの編者が注にあげているように創世記3章6節の禁断の木の実が「目に美しかった」が、その美しさとは裏腹に蛇がイヴを騙す手段として使われ、人間の樂園追放につながっていくように、恋人の美しさの下に隠されているものは、人間を破滅に導きかねない危険なものだという意味であることに間違いはないだろう。それではその美しさというりんごは誰を破滅させようというのか。その点に関して、たとえば *Dover Wilson* が注で言っているような¹¹⁾ 詩人の恋人にあたる男がその美貌でいかに次々と女性たちを我がものとし墮落させてきたかというような解釈は私には納得し難い。勿論 *Dover Wilson* はこのソネット集全体からシェイクスピアの個人的な経歴を読みとろうとし、ソネットの語る内容を歴史的事実と一致させようとする読み方をしている。しかし今、*Farewell Sonnets* の *sequence* にかぎっての読みをしようとする時、又そうすることが可能であると私は信じているのだが、その場合には詩人と恋人の二者以外の視点が生じてしまつては二人の存在の間の強い緊張感は崩れてしまい台無しになる。恋人の美しさというイヴのりんごが騙す相手はアダムにはかならず、アダムとは勿論詩人その人である。改めて創世記3章6節を引用してみよう。

And when the woman saw that the tree was good for food, and that it was pleasant to the eyes, and a tree to be desired to make *one* wise, she took of the fruit thereof, and did eat, and gave also unto her husband with her; and he did eat.

「イヴのりんご」とは、イヴの目に美しく見え、イヴの口においしかったりんごでもあれば、イヴがその手からアダムに与え、アダムが食べたりんごでもある。アダムはりんごを自分も食べることによって、まずイヴによってもたらされた人間の破滅、人間の死を自らも引き受けたのである。この93番のソネットをふりかえってみれば、‘a deceived husband’ という言葉又 ‘heaven in thy creation did decree’ という行も、結句のイヴのりんごへと秘かに下準備がなされていたことを示している。そうすればイヴのりんごがこのソネットの中で最も重要な言葉であることには疑いの余地はない。詩人はりんごを食べる、その意味を十分承知の上で。同時に彼は死をも破滅をも一切その身に引き受けてしまうのだ。恋人と共にあるのならどんな運命であろうとその運命を共にするのだという詩人側のこの愛への積極的なかわり方がこの結句に現れていると私はとりたてたい。恋人と一緒に死をも厭わないというのはすべての愛の世界において行きつくべくして行きつくところではあるが、ここに詩人は実に見事に行きついたものだと思うのである。が、ここにたどりついたからには、又もやこれ以上は進めない限界点に達してしまったのだ。再び詩人には転進しなければつづけては愛を語ることはできない。

次の転進地が94番において展開されるのだと言いたいところなのだが、私には実のところ94番はこの sequence に含まれるべきなのかどうか疑問に思われて仕方がないのである。確かにイヴのりんごから夏に芳しく咲く花、その花が病毒に犯されるというイメージは連続しているだろうし、最終行の ‘Lillies that fester, smell far worse then weeds.’ はイヴのりんごの内面を外観がもはや支え切れなくなってふき出すままにさせた状態を言っているように思われる。そういう意味では連続性はあるのだが、94番全体が冷淡な、批評家の目で書かれている点が、この sequence の中では際立って違った感じを与えるのである。ぎりぎりのところにまで追いつめられた愛を倒錯した形で歌

うことの実験は成功したといって良いであろう。しかしこのシチュエーションでの実験が限界に達してしまった時、もう次のシチュエーションへの準備にかからねばならないのだ。94番は95番以後への橋渡しであると考えべきではないだろうか。

こうして Farewell Sonnets を見てきた時、イヴのりんごはこの sequence 全体にとっても大きな存在を占めているように思われる。創世記の3章をつづけて読んでいくと神の審判の場面となり、その16節においてイヴは彼女に対する裁きの最後に ‘he (i. e. thy husband) shall rule over thee.’ という神の言葉を聴くのである。この言葉をもイヴのりんごにからめて考えてみることは出来ないだろうか。ましてや ‘husband’ という言葉が93番で非常に暗示的な位置を保っているのであれば。93番における「夫」は詩人である。そうすれば「妻」は恋人に違いない。その妻を支配するのが夫となれば、ここで詩人と恋人の立場は逆転するといって良い。高貴な身分で比べるものもないほどの美貌を備え、しかもこの上なく不実な恋人にひたすら低姿勢ですがるように愛を歌いかけつづけたのは詩人の方であったのに、突然読者はここで、この高慢な恋人も虚構の愛の世界も、そして多分読者さえも、詩人の掌の上にあったことに気づかされるのである。

注

- 1) 引用はすべて Quarto 版に最も忠実な *Shakespeare's Sonnets* ed. Martin Seymour-Smith, (Heinemann) による。
- 2) 同上。See Introduction.
- 3) 同上。
- 4) Iver Winters, ‘Poetic Styles, Old and New’, *Shakespeare: The Sonnets: A Casebook* ed. Peter Jones (Macmillan) p.155
- 5) See Introduction of *The New Shakespeare: The Sonnets* ed. John Dover Wilson (Cambridge University Press)
- 6) *Shakespeare's Sonnets* ed. W. G. Ingram and Theodore Redpath, (University of London Press)
- 7) 前出。p.156
- 8) 「英語青年」1973年1月号『合評 Shakespeare's Sonnets (10)』小川和夫・河村錠一郎・橋口稔(研究社)
- 9) 前出。p.202
- 10) 「シェイクスピアのソネット——愛の虚構」田村一郎・坂本公延・六反田収・田淵貴實男共著(文理) p.279
- 11) 前出。p.199